

書 評

「歴史と人間」を読んで

服 部 清 道

先きごろ或る人が、人間は幾つもの「心」をもっているといった。「心」とは何ぞやという難かしい論議は別として、人間の「心」は多面的であり、多様性があるという意味であらうか。

私たちは職掌柄、また学究的な立場から、いつも重苦しい活字とにらみあっているが、そうした生活の奥底にはもっと軽い活字、肩のこらない、さりげなく読めて、しかも心の糧になるようなもの、という欲求があることを否定しないだろう。私はつい近いころ、そうした書物に目をとらす機会に恵まれた。

『歴史と人生』。これは安彦孝次郎教授の近著である。といっても、これは「歴史」という表現から、僅かに視点をボカしてみた方が、軽く読めて、したしめる書であらう。「歴史と人生」との関わりあいというよりも、日本経済史学者の人生観と

でも評すべきものを、私は読後感としてもったのである。

著者は本書を、その「あとがき」で「戦前から近年に至る迄折に触れて書き綴ったエッセイ集である」という。この書は全篇四部から成っている。第一部「歴史と人生」、第二部「日本の風土と国民性」、第三部「人生随想」、第四部「思想ノート」で、書題名は第一部のタイトルに拠ったことはいうまでもない。

第一部はこれに、歴史断想、ある歴史的人間像、二人の経世家、悲劇の武士団、現代時評、と五つの目を置いている。第一目はその冒頭に「歴史は過去に起った人間的哀歎の種々相を時の流れの中に織り出してくれる。織られた模様は巨細濃淡さまざまであるが、互に絡み合い乍らその形貌を変えて行くのである」と史観を樹て、続いて「万物は流転する」という、「一切

は変化して己む事を知らない」という原点に立脚して、万象流転、生々輪廻の相の裡に人間の歴史、人間社会があることを語るうとしてゐるようである。第二目は「ある歴史的人間像」として、上杉鷹山をとりあげ、鷹山が行なった米沢藩政改革の実績を、その人間性を実証的に論及している。第三目は前の目をうけて、二人の経世家として、鷹山と二宮尊徳を並べ、両者儉約思想を対照している。鷹山と尊徳とは、時間的に三十年余の前後差がある。しかし、それは当時の経済史的流れの上では、殆んど無視されていいほどのものである。しかも両者の経済政策は、その志向において信条において、余りにも似通っていたことを著者は指摘している。しかし、その政策上の方法に相異があったのは、両者の立場の相異からと理解して、若し、尊徳が、その時代に、一城の主であったならば、果して所謂「天下の経済」を実践し得たかどうか、また鷹山が、尊徳の立場であったならば、どういう考え方をしたであろうか、想えば、興味の油然たるを覚える、と問題を投げかけている。たしかに、一

藩士民の死活を双肩になう経世家と市井の経政治家とは、たとえ表現形態が相似たとしても、均一的な価値観では評し難いものがある。第三目は「赤穂浪士について」というサブタイト

ルがある。著者は「昭和十七年稿、四十九年加筆」とことわっているが、私はこの論評の裡に、現代の荻生徂徠を見出したのである。第四目はこれまた「一九七四年、日記抄」と、サブタイトルがある。断片的な時評のなかに、著者の社会観、人生観が存分に浸透されているやに読みとれる。

第二部の「日本の風土と国民性」は、山と日本人、釣と人生、日本の樹木、花と人生、旅ごころ、海外の風物と日本人、という六篇立てである。「山と人生」では、「山は神霊の在す場所」としての考え、「釣と人生」では、釣りに自然にしたる心を語り、「日本の樹木」では松の清淡さをたたえ、竹の直截を語り、柳の繊弱と可憐さを評し、銀杏の妖異にも似た神秘さを追う感じがうかがわれる。「花と人生」においては、「花こそは、この世のオアシスである」としながら、花を日本の移り変りが早い季節のなかに捉え、そのままが流転の人生のすがたと観じとっている。「旅ごころ」の中には、自然人としての著者が見出される。「海外の風物と日本人」は、昭和一四年の起稿であるが、著者が昭和四年、文部省在外研究員として二年間、ドイツ留学に横浜港から旅立った追憶らしい。印度洋の船旅の中に、多彩な海外の風物を取り込み、日本の風土を、そし

て日本人を外と内から客観的に観察し、批判するという。いともたくみな筆の運びである。

第三部「人生随想」は、着物と洋服、玩具、映画、書、挨拶、養生、坐禅と小景、兵卒の体験、炭焼き村、受験生に与う、ある書簡、と短篇の集録である。そのうち、「玩具」には「模型飛行機と私」というサブタイトルがついていて、若かりしころの別人的な著者を発見できて愉しく感じた。これも古い頃の追憶であるが、横浜へ転居のための煩らわしさに、庭の落葉の上に積み重ねて焼いたというが、かつて円覚寺の禅堂で接心した経験の著者にしても、煩悩模型飛行機は、四〇年後の今にして断ち切れないようである。「受験生に与う」は可成り以前の起稿らしいが「現在まで関心の続いているものを選んだ」といわれているように、著者がいわんとする道理は、今に強い説得力を失ってはいないようだ。浪人生活、受験生の友情、受験生と家庭、秀才と天才、受験生と日記、都会と田舎、の六篇立てである。著者は、浪人という言葉の中には、人生の無常と男の意地と忍耐の心が浸み込んでいると理解し、受験浪人を深い理解と愛情をもつて諄々と、きめこまかに説き、浪人生活の間に浸透したこの世の苦しみこそは、実に人間生長の礎石になるとの理

を納得させようとしている。こうした著者の理解と愛情とは、次ぎの「ある書簡」にもあらわれている。この一簡は、「学半ばで帰郷した友に贈る」とサブタイトルがついており、さらに稿末に「著者が学生時代、東大経済学部を中退した友を惜しみ、一年後に、郷里の『米沢有為会雑誌』に掲載したものである」と附言されて、大正十一年六月という半世紀以前のものであるが、その一節々に友への切言を通して、著者の人柄がしのばれる。

第四部「思想ノート」は、さきの二篇で緊張した気分を和らげる役割をもっているようにもうけとれる。「守破離」について、常識と非常識、思いつき、退屈と多忙、対話、読書、専門、秘密、行の世界、そして最後に「人間断想」という格言めえたもので結ばれている。

この書はB6判、10P組版で、あまり力まない文体で、且つ節々の切れ目が適度に白く抜けているので、軽い気持ちで読み終えることができる。著者の言に、第一部には最近のものを収録したが、第二篇以下の大半は昭和十三、五年の旧著の中から、現在まで関心の続いているものを選んだ」とあるとおり、古きは大正十一年、新しきは昭和四十七年という半世紀余にわたる

人生航路のエッセイ集で、著者の分身ともうけとれるものである。暴評、御寛恕を得たい。

初版本と重版本

漁書趣味者は初版本を尊ぶ。その理由はいろいろあるが、ひらたく言えば「初物食い」的なものであろう。また、重版された著名な書物は、初版の数量は、その後の重版の総量よりも僅少だという、稀少価値観が加わっているかも知れない。しかし、そこに大きな問題がある。即ち、初版本と重版本とを識別する基準である。江戸時代書賣の多くは慣例として、重版の場合、あまりに初版との時間的な隔りが無い限り、初版本の奥附をそのまま版行したのであった。したがって、初版後、二版、三版と続いて重版されるときは、版本はもとより、用紙も刷り手も製本も、初版本そのままの体勢でなされたことを想像しなければならぬ。また書賣も、初版本と同じ出来ばえの重版本を出すことが商売の「こつ」として考えていたであらう。このような手段で再版された場合には、およそ後代においては、初版本と再版本との識別は極めて困難といわざるを得ないだらう。或いは、版本の磨滅の度合を識別の手がかりとした場合で

も、江戸時代の造本は、今日のような大量刷りは考えられず、僅かに百冊単位のを版行して、世評を俟って重版するという方法をとったようであったから、「初版の末」と「再版の初」の版本の磨滅度合いを刷り上り本によって識別することは、後代の人間の眼識では不可能に近からう。表紙に依る「手沢」の具合いと云っても、ともに二百年、二百五〇年という歳月を経ている今日では、これまた相違を見出すことは出来ない。

江戸時代には刷り本の「版本」の売買がよくおこなわれていた。そこで求版され、再版される場合に、新版元は、旧版奥附の版元の部分だけを埋め木で新にして、版行の年月をそのままにするという例も多かったのである。しかし、そのような版本は、さきの場合とは万端のお膳立てがちがひ、且つ、埋め木の部分の書体や磨滅の度合いが遠っている場合が多いので、直ちに重版本であることが見分けられる。

それについて、明治・大正期の版本は、奥附そのものに信頼がおけた。これには、印税、検印という新制度が大きな支えとなっていたと考えられる。ところが、近頃の版本は、それがひどく乱れているようだ。とりわけて、大衆向けの大量印刷本において甚だしいものがある。例えば、初版と二版とを同時印刷

して、単に取次店から配本され、小売の店頭にならべられる時間差を置いているにすぎないというものがあり、且つそうした弊風が横行しはじめているという現在の出版界である。その原因の一つとして、「買切り原稿」制ということにより、検印のブレイキがなくなったことが考えられるが、それにしても、見せかけ商法に狂奔する書賈のモラルの低下振りはなげかわしい限りである。こうなつては漁書趣味、初版本漁りは取り楫の方向を変えざるを得まい。そこにつけ込んだのが豪華本、高価本の限定出版である。私はこのようにみている。

（服部記）